明石国行と猫明石国行

「もう、ほんまになんやねん……」
　この本丸の近侍、明石国行は、ため息交じりに呟いた。今日の日課鍛刀で顕現されたその子の面倒を見るように、と主である審神者から仰せつかってしまったのだった。
「にゃーん」
「なに？　お腹空いたん？」
「にゃーん！」
　明石の言葉がわかるのか、その猫は目を輝かせて嬉しそうに鳴いた。もともと保護者気質の刀である明石、弱いものから縋られて無碍にはできない。
「猫……猫のごはんて何あげたらええんかな……」
　猫の頭を撫でてやりながら考えていた明石は、ふと閃いた。
「……虎も大きな猫やんな」
　明石はそう口に出し、猫を抱き上げて粟田口派が使っている大部屋へと足を向けた。

「五虎退くん、おる？」
「は、はい、なんでしょうっ」
　訪ねた粟田口部屋では短刀たちがすごろくを楽しんでいた。声をかけられた五虎退が顔を上げ、部屋中の短刀たちの目が明石に集まる。そして、もちろんその腕の中には明石そっくりの猫がいるのである。みんなすごろくをほったらかして明石のもとに集まってしまった。
「明石さん、その猫ちゃんは？」
「かわいいですね！」
「明石さんそっくりじゃありませんか？」
「名前はなんて言うんですか？」
　質問攻めにされる明石。短刀たちの勢いにたじっと後ずさりながらなんとか答える。
「なんや主はんが竹札と間違うて猫札とかいうの使うてしもたんやて」

「猫札っ？」
「猫に懐かれるお札をお友達の審神者はんからもろたらしい」
「主君はうっかりしているところがありますからね」
「ええと、名前はまだあらへんよ」
「じゃあみんなで付けてもいいですね！」
「あの、名前付けてあげるのはかまへんけど、ちょお五虎退くん」
「は、はいっ」
「虎くんたちのごはんて何あげてはる？　猫のご飯とかあらへんやろ？」
「名前は猫明石国行、略して猫明石。飯ならこれだ」
　部屋の外からやってきて、どさりとキャットフードの袋を置いたのは薬研藤四郎だった。
「薬研兄さん！　もっとかわいい名前を付けてあげてください！」

「いいじゃねぇかわかりやすくて」
「ええと……薬研くん、おおきに？」
　どうして薬研が、とでも言いたそうな顔で明石は薬研の顔を見る。破顔して薬研が種明かしをした。
「大将がな、青い顔して医務室に来たんだ。猫を鍛刀してしまった気がする、ってな」
「気がしたやあらへんわ、ほんまに鍛刀してますやんあのお人」
「俺っちも半信半疑だったんだがな、旦那が猫抱えてるのが見えたんでな」
　どうやらその場で万事屋ドットコムのお急ぎ便でキャットフードを注文してくれたらしい。古参でありちょっとしたことで動じない薬研はこういうとき変に頼もしい。
「ついでに猫用のベッドとトイレと買い方指南書も頼んどいたぞ」

「そらおおきに。主はんに渡したげなあかんな」
「なに言ってんだ？」
　薬研は当然のようにこう言い放った。
「猫明石の世話役は旦那だろう？」
　猫用のあれこれは来派部屋に置いてきたぜ、と言い残して薬研は医務室へと戻って行った。

　片手に猫明石、片手にキャットフードを抱えた明石が来派部屋に戻ると、目を輝かせた愛染国俊と蛍丸がいた。
「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」
「えー、国行よりかわいいよ」
「勝手なこと言わんと、ちょお手伝って」
　明石は愛染に猫明石を押し付けて、薬研が置いていった段ボール箱を漁る。
「あったあった、これやな」
　猫用の食器を取り出し、一方に水差しから水を入れてやり、もう一方にはキャットフードの袋を開けて盛ってやる。猫の飼い方本をぱらぱらとめくりながら量を調節したようだ。

「にゃうんっ」
　猫明石は嬉しそうに水をぴちゃぴちゃと飲んでからゆっくりとフードを食べ始めた。やっと落ち着いた、と明石は深くため息をついた。愛染が訊く。
「この猫、国行が面倒見るんだろ？」
「どうやらそうみたいやなあ」
　蛍丸も訊く。
「主さんが欲しがった猫じゃないの？」
「主はんに猫の面倒とか見れへんやろ」
　そうなのだ。この本丸の主である審神者は柔らかく言って面倒くさがりだ。それはもう、やる気あらへんが口癖の明石をはるかに凌ぐ。明石は口では面倒だと言ってもやらなければならないことはきちんとこなす。

ところが審神者はと言えば……。
　明石が近侍だと落ち着く、というのが主の弁だが、自分よりはるかにやる気がない主を支え、ひいてはこの本丸を支えているのが明石だというのは周知の事実である。
　フードを食べ終えた猫明石は座り込んでいた明石に近寄り、すり、と頬ずりをした。明石の手は自然と猫明石の頭に伸び優しく撫でてやる。
「あんたも難儀なところに来たなあ」
　成り行きやけど自分が面倒見たるからな、と話しかけながら猫明石を撫でる明石を愛染と蛍丸は笑いをこらえながら見つめる。愛染も蛍丸も、自分たちの保護者のそういうお人好しなところが大好きだった。

〈了〉

二〇二一年四月十日　佐藤こおり発行
@ice13g